

子どもの学びの意欲を満たす小学校音楽科授業の研究

——子ども・大学生・教師の実態調査を踏まえて——

教科・領域教育専攻
芸術系コース（音楽）
笛木晶子

1. 問題の所在

「音楽の授業は息抜きの時間」と言う子どもや、「音楽ができない」と気軽に口にし、逃げの姿勢を見せる教師。これらの言葉は、学校において音楽科の占める位置というものを端的に表している。一般的に音楽という教科は、国語や算数といった他の教科に比べ、子どもたちに身に付く力が子どもたち自身、自覚しにくい教科であると言っていいだろう。学校教育以外の音楽教育を受けている子どもたちは、その経験年数に比例して音楽的な力が付いているのは実感するが、教科としての音楽の授業において身に付く力となると、はっきりした答えが得られない。このようなことが、冒頭の言葉が発せられる原因となるのではないだろうか。

子どもたちは、音楽の授業で何を学びたいと希望しているのか。そして、現在の音楽の授業はそれを満たしているのだろうか。筆者は、そこに何らかのズレがあるのではないかと考えている。その結果、子どもたちは、音楽の授業と自分の生活との間に接点を見出せず、音楽の授業はリアリティの感じられないものになってしまっているのではないかと考える。もし、子どもたちが学びたいと希望している内容が、音楽の授業において実現するならば、子どもたちにとって、音楽科はもっと身近な意義あるものとして捉えられるはずである。本研究は、子どもたちの学びの意欲を満たす音楽授業の在り方について

ついて探っていくものである。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、子ども・大学生・教師への小学校音楽科に対する願いや実態の調査を基に、実践者の一人として小学校における音楽授業の意義を再確認し、子どもの学びの意欲を満たす小学校音楽科授業の在り方について模索することである。

そのための方法として、教える側である教師の音楽の授業に対する意識、実践、及び学ぶ側である子どもたちの音楽の授業内容に対する希望を両者ともアンケートにより調査を行い、かつ自己を客観的に振り返ることのできる大学生についての調査も加え、それを比較・分析する形で考察を進めながら、研究の目的である子どもの学びの意欲を満たす音楽科授業の在り方について考えていきたい。

3. 教える側の意識

新潟県内の小学校に勤務する主に音楽を研究教科とする教師51名を対象にアンケート調査を行った結果をまとめた。アンケートの内容は、自身の音楽の授業内容に対する考え方・意識・悩みなどである。その結果、重要であると考えている学習内容としては、「レパートリーの拡大」「合唱」「合奏」「良い発声方法を身に付ける」「読譜能力」「鑑賞」「世界の音楽に触れ音楽の価値観を広げる」「日本音楽に親しむ」などであることがわかった。それに対して、実際

に力を入れて実践を行っている」と回答のあった学習内容は、「発声指導」「レパートリーの拡大」「合唱」「リコーダー・鍵盤ハーモニカの技術指導」「いろいろな楽器に触れる機会を作る」合奏」などであった。両者を比較すると、「読譜指導」「鑑賞」「民族音楽の教材化」「地域に伝わる音楽の教材化」「日本音楽の教材化」の5項目は、重要と思われているが、実際にはあまり実践されていない学習内容であることがわかった。

また、そのほか時数削減に伴う問題、個人差への対応が困難であるという問題、教師自身の指導力の不足や多忙の問題についての意見が寄せられた。

4. 学ぶ側の意識

新潟県内の7つの小学校の5、6年生417名を対象に、音楽の授業を通してできるようになりたいこと、学習したいこと、音楽の授業に対する意見などを、また大学生120名を対象に小学校時代の音楽の授業でもっと学びたかったこと、意見などについてアンケートを行い、その結果をまとめた。その結果、小学生の子どもたちが音楽の授業で学びたいと思っている学習内容で特に希望が多かったものは、「いろいろな楽器が演奏できるようになりたい」「楽譜が読めるようになりたい」であった。また、大学生からは、小学校の音楽の授業でもっと学びたかったこととして、「多様な楽器体験」「読譜・理論の学習」についての希望があった。またそのほか、個人差への配慮を求める意見、教師に対しての要望等も多く寄せられた。

5. 教える側と学ぶ側の意識の比較

教える側と学ぶ側双方のアンケート結果を比較すると、幾つかの点において大きなズレがあることが明らかになった。まず、教師の実践と子どもたちの学びたいと希望する学習内容との間で、ズレが顕著であるのは、「読譜」と「音

楽理論の学習」である。子どもたちの楽譜が読めるようになりたいという希望は、71%もいるが、実際に読譜の学習に力を入れて実践していると回答した教師は35%しかいない。音楽理論についてわかるようになりたいと思っている子どもは63%であるが、実際に授業で教えていると回答した教師はわずか6%であった。子どもたちが学びたいと希望している理論についての内容を含む読譜指導をきちんと行う必要がある。

6. 子どもの学びの意欲を満たす音楽授業の在り方

調査結果を踏まえて、子どもたちの学びの意欲を満たす音楽授業のコンセプトとして次の4つのことを挙げた。

- (1) 読譜指導をカリキュラムに組み込む
- (2) 多様な楽器体験の重視
- (3) 個人差への配慮
- (4) 共同性という特長を生かす

読譜指導は、他のコンセプトを実現する土台となるものでもあると考えたので、カリキュラム化を試みた。小学校1、2年生を対象にし、ハ長調のト音記号の五線譜上の位置がわかること、調性感覚を身に付けることを目指したものである。

7. まとめと今後の課題

読譜指導カリキュラム案の有効性の検証と修正案の立案が今後の課題である。また、小学校全科担任が音楽の授業を担当することの難しさという教師に関わる問題も浮かび上がってきたが、この問題については、深く追究することができなかった。この点についても今後の課題としたい。

指導教官 小川昌文